

平成26年度病虫害発生予報第2号

平成26年4月23日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

区 分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	苗立枯病	—	平年並
		ばか苗病	—	平年並
		イネミズゾウムシ	遅い	平年並
果樹	ナシ	黒斑病	やや早い	平年並
		黒星病	やや早い	平年並
		赤星病	平年並	平年並
		カメムシ類	やや早い	やや多い
	カキ	灰色かび病	やや早い	平年並
野菜	ブドウ	灰色かび病	平年並	平年並
		べと病	平年並	平年並
		べと病	平年並	平年並
	ネギ	さび病	やや早い	平年並
		袈裟ハダカリバエ、袈裟アザミウマ	平年並	平年並
野菜	スイカ	菌核病	平年並	平年並
		つる枯病	平年並	平年並
	スイカ、メロン	アブラムシ類	平年並	平年並
		ハダニ類	平年並	平年並

気象予報（抜粋）

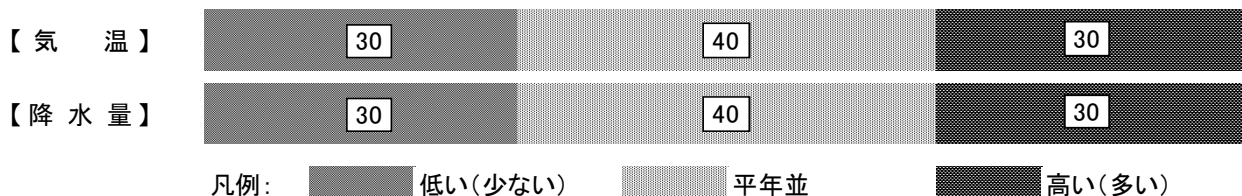
1か月予報（4月19日～5月18日：4月17日、広島地方気象台発表）

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

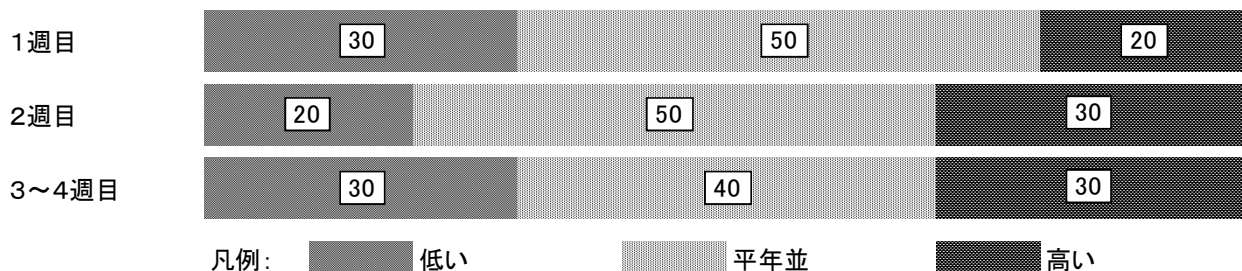
天気は数日の周期で変わるでしょう。平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50％です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[イ ネ]

1 苗立枯病

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病後の防除は困難であるため、予防防除を徹底する。

イ 育苗環境を清潔に保ち、育苗中の温度管理及び水管理に注意する。

ウ リゾプス属菌による苗立枯病が発生した場合には、発病部分の回復は見込めないが、緑化期(但し、は種14日後まで)までであれば、直ちにダコニール1000(使用回数は2回以内)の500～1,000倍液などをかん注することにより、蔓延を防止できる。

エ ムレ苗が発生した場合には、タチガレエース液剤(育苗箱への灌注は1回以内)の500～1,000倍液又はタチガレン液剤(育苗箱への灌注は2回以内、ただしタチガレエース液剤等のヒドロキシイソキサゾールを含む剤を使用した場合は1回以内)の500～1,000倍液を、1箱当たり0.5リットルかん注し、夜間の保温と昼間の遮光に努め、苗の回復を図る。移植可能であれば、早めに本田に移植する。

2 ばか苗病

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

前年の本病の発生は平年並であったため、本年用種子の保菌率は平年並と推測される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 温湯種子消毒では、浸漬時間、温度などを厳守する。消毒後の種子を保管する場合には、種子を十分に乾燥させ、清潔な冷暗所に保管する。浸種時には、必ず水道水を使用し、適宜、水の交換を行う。

イ 薬剤による種子消毒(低濃度長時間浸漬)にあたっては、以下のことに十分注意して行う。浸漬処理時の薬液量の不足、あるいは低温時の処理で効果が低下するので、十分な薬液量を確保し、液温は10℃以上を確保する。消毒後の浸種は停滞水中で行い、水の交換は原則として行わないが、水温が高い場合など酸素不足になる恐れがあるときは静かに換水する。なお、薬剤については、病虫害防除指針などを参考にする。

3 イネミズゾウムシ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生時期 遅い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月22日現在、予察灯(鳥取市橋本)への飛来は確認されていない。

イ 4月22日現在、本種の飛翔に必要な有効温度の積算値は平年に比べて少ない。さらに、向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年に比べて遅くなる

ものと見込まれる。

ウ 前年の第1世代成虫の予察灯への誘殺数は平年並であった。

(3) 防除上注意すべき事項

育苗箱施用剤の防除効果が高いので、使用時期及び使用量を守り、1箱ずつ丁寧に薬剤を施用する。特に1箱当たりの施用量が不足すると、著しく防除効果が低下するので注意する。なお、薬剤については、病虫害防除指針などを参考にする。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場における4月第3半旬までの孢子飛散数は、ほぼ平年並であった。

イ ナシ園における越冬菌密度調査の結果によると、短果枝の病芽率は平年と比べてやや低く、一年枝上の枝病斑数はほぼ平年並であった。病枝率は、調査園全体の平均値は平年と比べてやや低かったが、一部で病枝率の高い園が認められた。

ウ ナシの生育は平年と比較してやや早い。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 小袋掛け終了までの薬剤散布の間隔は5～7日程度とし、特に小袋掛け直前の防除を徹底する。

イ 薬剤はベルコートフロアブル1, 500倍液、ユニックス顆粒水和剤47の1, 500倍液、有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1, 000倍とポリオキシシンAL水和剤1, 500倍の混用液などを使用する。

ウ スピードスプレーヤにより防除を実施する地域では、往復走行又は縦横走行による散布を行い、散布むらが無いように注意する。

エ 雌しべ感染を防ぐため、摘果するときにはできる限り雌しべを取り除く。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場における病落葉からの子のう孢子飛散数及び果そう基部病斑からの分生子飛散数は平年と比べてやや少なく推移している。

イ ナシ園における越冬病芽調査の結果によると、腋花芽の病芽率はほぼ平年並であった。

ウ ナシの生育は平年と比較してやや早い。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる果そう基部病斑は見つけ次第切除し、ほ場外で処分する。

イ 薬剤は、落花期にE B I 剤（スコア顆粒水和剤又はオンリーワンフロアブル）4，000倍とチウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）500倍の混用液などを、摘果期にはベルコートフロアブル1，500倍液、ユニックス顆粒水和剤47の2，000倍液、ファンタジスタ顆粒水和剤4，000倍液などを散布する。

3 赤星病

（1）予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

（2）予報の根拠

ア 県予察ほ場（北栄町由良宿）のビヤクシン上における冬胞子堆形成量はほぼ平年並であった。また、成熟度100%の冬胞子堆が初確認された時期は4月18日（平年値：4月17日）であり、平年並であった。

イ 県予察ほ場におけるビヤクシン上の冬胞子堆は、ほとんどが成熟度100%になっている（4月21日現在）。

ウ ナシの生育は平年と比較してやや早い。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 薬剤は、落花期にE B I 剤（スコア顆粒水和剤又はオンリーワンフロアブル）4，000倍とチウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）500倍の混用液などを散布する。

イ 例年発病の多い園又は初期病斑が多く認められた園では、5月上旬にE B I 剤（スコア顆粒水和剤又はオンリーワンフロアブル）4，000倍液などを追加散布する。

4 カメムシ類

（1）予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

（2）予報の根拠

ア 4月第3半旬現在、県予察ほ場（北栄町）における予察灯及び集合フェロモントラップにはカメムシ類の誘殺は認められていない。

イ カメムシ類の越冬密度はやや高いものと予想される。

ウ ナシの生育は平年と比較してやや早い。

エ 向こう1か月の気象予報から、春季におけるナシ園への成虫の飛来時期は、やや早い4月下旬～5月上旬頃と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 特に山間地や民家近くのナシ園で、例年発生が認められる園では、幼果期の防除が必要である。

イ 摘果期～小袋掛け期の幼果を加害するので、この時期に果樹園への飛来が認められた場合、直ちにジノテフラン水溶剤（アルバリン又はスタークル顆粒水溶剤）2，000倍液などを散布する。

[カ キ]

1 灰色かび病

（1）予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平 年 並

（2）予報の根拠

ア 4月中旬現在、本病の発生は確認されていない。

イ カキの生育は平年と比較してやや早い。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 病原菌は低温、多湿条件を好むため、天候不順が続くと本病が発生しやすい。

また、強風などによって若葉が傷ついた場合に突発的に発生しやすい。

イ 西条、伊豆などの品種では、本病の発生が多い傾向にある。

ウ 防除薬剤は、フルピカフロアブル3, 000倍液、ゲッター水和剤

1, 500倍液又はオンリーワンフロアブル2, 000倍液などを散布する。

[ブドウ]

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、本病の発生はほとんど認められていない。

イ ブドウの生育はほぼ平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 病原菌は低温、多湿条件を好むため、開花期が天候不順になると、本病が発生しやすい。

イ 開花前～落花後にパスワード顆粒水和剤1, 500倍液、スイッチ顆粒水和剤3, 000倍、ゲッター水和剤1, 500倍液、ポリベリン水和剤

1, 000倍液、ロブラール水和剤1, 500倍液及びロブラールくん煙剤

100g/くん煙室容積300～400m³(高さ2m、床面積150～200m²)などを使用する。

ウ 施設栽培では多湿条件が続くと発病が多くなるので、早朝の換気を行って施設内の湿度を下げる。

2 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、本病の発生はほとんど認められていない。

イ ブドウの生育はほぼ平年並である。

ウ 前年の発生量は平年並であったことから、越冬伝染源密度は平年並であると考えられる。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並であると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 開花期以降の天候不順は、本病の発生を助長するので注意する。

イ 薬剤は、落花後(小豆大)にアミスター10フロアブル1, 000倍液、ストロビードライフフロアブル2, 000倍液又はベトファイター顆粒水和剤

3, 000倍液などを使用する。

ウ 巨峰、ピオーネ、青ブドウにおいて、べと病の発生が例年多い園では、展葉6～8葉期にアリエッティC水和剤800倍液を追加散布する。

エ 発病果及び病葉は見つけ次第、園外に持ち出して処分する。

野 菜

[ネ ギ]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は、15℃前後の気温で降雨が続くと発病が増加するが、向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病後のまん延は早いので発病前からの防除に努める。

イ ランマンフロアブル2, 000倍液、アリエッティ水和剤800倍液、ペンコゼブフロアブル600倍液などを予防散布する。

ウ 発病を認めたら直ちに、リドミルゴールドMZ1, 000倍液、フォリオゴールド1, 000倍液、レーバスフロアブル2,000倍液、フェスティバルC水和剤1, 000倍液などを散布する。

エ 同一成分を含む薬剤は連用しない。また、成分ごとの総使用回数に注意して薬剤を選定する。

2 さび病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 春期における初発生は、平年よりやや早い3月20日頃から一部のほ場で認められた。

イ 4月中旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除は、孢子飛散が始まる4月下旬頃からオンリーワンフロアブル1,000倍液、ラリー乳剤4, 000倍液などを散布する。

イ すでに発病がみられている場合は、ラリー乳剤にカリグリーンの800倍液を混用散布する。

ウ 多発ほ場では、アミスター20フロアブル2,000倍液を散布する。

3 ネギハモグリバエ・ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、現地調査ほ場において、ネギハモグリバエ、ネギアザミウマともに発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、両種とも発生時期、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗の定植時には、オンコル粒剤5の6kg/10a、ジノテフラン粒剤（アルバリン粒剤又はスタークル粒剤）6kg/10aの株元散布又はアクタラ粒剤5の9kg/10aの作条混和处理などを行う。また、定植前日～定植時のジノテフ

ラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）50倍液の育苗トレイ灌注なども効果的である。

イ 本圃生育中のネギに対しては、オンコルマイクロカプセル1,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液などを散布する。

[スイカ]

1 菌核病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は、15～20℃位の気温で多湿条件が続くと発病が増加するが、向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。マルチ上にたまった水は適宜、穴を開けて排水する。また、咲き終わった花卉は発病しやすいので、摘み取って除去する。

イ 薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、カンタスドライフロアブル1,500倍液、セイビアーフロアブル20の1,000倍液、ロブラール水和剤1,000倍液などを散布する。

ウ 曇雨天が続く場合は、ハウスではスミレックスくん煙顆粒6g/100m³（床面積50m²×高さ2m）、ロブラールくん煙剤100g/300～400m³（高さ2m、床面積150～200m²）などを使用する。

2 つる枯病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。

イ 本病は株元を中心に発病が始まるので、株元にも薬液が十分かかるように散布を行う。薬剤は、ジマンダイセン水和剤600倍液、アントラコール顆粒水和剤600倍液、ダコニール1000の1,000倍液などを散布する。

[スイカ・メロン]

1 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、現地調査ほ場においてアブラムシ類の発生はほとんどみられていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止

に努める。

イ 初発生に注意し、初期防除を徹底する。

ウ スイカのハウス栽培では、交配前にはチェス顆粒水和剤 5, 0 0 0 倍液などのミツバチへの影響のない薬剤を散布する。

エ スイカのトンネル栽培では、つる引き誘引時期にチェス顆粒水和剤

5, 0 0 0 倍液、交配前にバリアード顆粒水和剤 4, 0 0 0 倍液などを散布する。

オ メロンでは、チェス顆粒水和剤 5, 0 0 0 倍液、バリアード顆粒水和剤

4, 0 0 0 倍液などを散布する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 4 月中旬現在、現地調査ほ場においてハダニ類の発生はみられていない。

イ 向こう 1 か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスなどですでに発生がみられる場合、スイカ、メロンともにバロックフロアブル 2, 0 0 0 倍液、ダニサラバフロアブル 1, 0 0 0 倍液などを散布する。多発した場合はコロマイト乳剤 1, 0 0 0 倍液、マイトコーネフロアブル 1, 0 0 0 倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類）などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病虫害防除所

(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※ 予報第3号の発表は、5月14日（水）の予定です。